

新潟県中越地震ボランティア活動概要

11月8日(月)

早朝6時、テント、寝袋、一週間分の食糧など一式約15キロくらいを背負って電車で池袋へ。7時、池袋発の新潟行き高速バスに乗車。土日のうちに出発したかったが、バス便の予約がなかなか取れなかったのも、やむなく月曜日の始発便乗車となった。バスの同乗者は被災地に家族や親戚を残している人が多く、ボランティアらしき人は少数だった。

関越高速に入り、小千谷を目指す。3時間も経っただろうか。関越トンネルを抜け、新潟県に入る。湯沢を通過。越後川口インターに近づく。片側一車線になり、道路が損壊している様子が見えてきた。ところどころ、舗装したばかりの黒々としたアスファルトが見える。24時間体制で工事していると言っていた。舗装し直したとはいえ、路面にはゆるやかな段差があり、高速走行できる状態ではない。徐行しながら走行する。道路両側の遮音壁は至る所で崩壊しており、標識も斜めになっていたり、倒れ掛かっていたりしている。

視線を道路外に移すと、屋根に青いビニールシートをかけた家が散見された。「意外と少ないな。」と思っていたら、間もなく激しく損壊している家々が現れ、辺りは青いビニールシートで覆われた家ばかりになった。乗客は一様に驚き、また声にならない声を上げている。「あー」とか「んー」とか、とにかく非常に驚いていた。しかし不思議なことに、この辺りの高速道脇の一般道はそれほど損壊している様子はなく、往来の車の走行にも大して支障がない様子だった。このナゾは後で現地の人との会話によって判明することになるのだった。

やがて小千谷インターに到着。高速バスを降りる。数人が降りた。大学生くらい、大きいザックを持ったいかにもボランティア風の男子が居た。声をかけてみる。私「どこに行くんですか？」大学生「川口町に行こうかと思ってます。」私「僕は小千谷に行こうかと思ってます。でもなんで川口町なんですか？」大学生「小さな町らしいので、そちらのほうが人手が足りないかな、と思って。」私「そうなんですかねえ。僕もまあどこでもいいんです。一番困ってそうなどこ行きたいんですよ。川口町ねえ。ここから10kmくらいかねえ。歩いて行けそうだね。」大学生「え！？この大荷物じゃ、ちょっときついなあ。」といろいろ話す。そうこうしてるうちに、不意に中年の女性に声をかけられる。「ねえねえ、ボランティアの人でしょ？私川口の実家に行くから一緒にタクシー乗って行かない？」渡りに舟、とはこのことだ。予定を変更し、川口町に向かうことになった。

タクシーで小千谷から川口町へ。この辺の道路や家は至る所で損壊している。途中、山崩れ？で国道がなくなっているところがあって、地元民しか知らないだろう道へ迂回した。やはり地元民のタクシーで正解だったと皆うなずく。その他、マンホールが浮き上がったり、道が裂けていたり、とにかく道路の損壊が激しい。乗車中にも震度5の余震があり、車ごと激しく揺れた。この運転状況の観察は、後のボランティア活動時の予行演習となり、大いに役立つことになった。

昼前後、ようやく川口町ボランティアセンターに到着。早速ボランティア登録をする。感染症対策係の竹本さんから預かったホカロンを手渡すと、深々と御礼された。「物資に渡しておきます、ありがとうございます。」私は「いえいえ、僕は預かっただけですので。」と言って置いたが、なんだか自分が御礼されたみたいで気が引けた。

住み家となるテント設営にかかる。ボランティアのテントは河川敷に並んでいた。そこにも数箇所地割れが見られた。ヒビと言うのには割れた幅が大きすぎる。数センチの割れ目で、正に地面が「裂けて」いた。大学生と「おいおいココ大丈夫なんか？」と笑った。対岸に自衛隊のテント群が設営しており、いざとなれば助けてくれるだろう、くらいの気持ちだった。

テント設営後、早速求職する。まもなく「パソコンできる人いますか？エクセル入力です。」と声がかかる。すばやく「出来ます！」と口走っていた。「何でも出来ます！」と言ってしまったら、大学生も付き合うことになった。「何でも役に立てばいいよねえ。」とまた笑った。

昼は少量の炊き出しがあったので、世話になる。本当に少量であったが、贅沢は言えないのは当然。ありがたく頂いた。そして入力。ボランティア登録した人の名前、住所等をひたすら入力

する。前日が日曜日だったので、まだ数百人の未入力者があった。

ところがいざ入力を始めると、勝手が非常に悪い。ウィンドウ枠を固定する、住所を郵便番号から入力する、略字入力化する、など改善し、スピーディに入力出来るようにした。どんどん入力していく。他3名の入力者に「おおっ。早っ！」と驚かれたが、こんなことで驚くのか、と、こっちが驚いた。大学生に同じような入力方法を教えて、更にスピードアップを図る。夜7時までかかって入力終了。日本人の名前の複雑さに閉口したが、まあ予定より数時間も早く終わった。ボランティア活動と直接は関係ないように見えるが、これも裏方の仕事として重要。少しは「活動」した気がした。

11月9日(火)

まだ暗いうちに目覚めた。余震だった。2回ほど大きな揺れ。テント生活は慣れているとはいえ、背中が直に揺れるという体験は初めてだ。怖くはなかったが、奇妙な感覚。6時半、隣のテントの大学生を起こし、ボランティアセンターに向かう。今日は「現場隊」という班で行動する。活動内容としては「車などを使用して地区に出向き、現場のニーズを吸い上げる」と聞いた。行動は常に2人1組。これは危険を少なくするための鉄則である。同年齢くらいの男子と一緒にになった。場所は「相川地区」担当となった。ボランティアの車を借りたが、自分の保険でカバーできるので心配はなかった。ボランティアセンター発行の新聞を持参して出発。

国道17号に入り、町内中心部を抜ける。至る所で警察の検問がある。町内中心部は長野県警の派遣部隊が多かった。途中、片側車線が激しく損壊し、片側交互通行になっている。反対側の崖に面した家は倒壊寸前で、もうすぐ崖に落ちそうだ。数日前から入っているボランティアによれば、この家は日々傾いており、いつ崖の下に落ちるか、時間の問題だという。

国道を右折し、地区に近づく。学校があった。辺りは大して損壊していないように見える。と油断していたら、マンホールが30センチほど浮き上がっており、危うくぶつかりそうになった。ちなみにマンホールはほとんどの道路で出っ張っており、地面が沈んだのか、マンホールが浮き上がったのか、通るたびに考えてしまった。やがて路面の舗装も崩れ始め、砂利道走行となった。他人の車であるので、慎重に運転する。

地区に到着。激しく損壊している家もある。道路を歩いているおじいさんに声をかける。「おはようございます。川口町ボランティアセンターの者です。」IDカードを見せつつ話す。というのは、ボランティアを装った泥棒が出没しているためだ。「そんなやつらは死刑だね。」とみんな言っていた。私も同意した。

じいさんと、とりとめもない話をする。奥さんらしいおばあさんが来た。同じくとりとめもない話をする。地震が起きてからのことを、一気に話された。30分くらいだろうか。話し終わると一瞬すっきりした顔になり、お茶を入れてくれた。茶菓はできるだけもらわないように、という注意があったが、成り行き上頂いた。

しばらく歩いて、またおじいさんと出会う。じいさんは手持ち無沙汰で、仕方なく木の剪定をしているようだった。再びとりとめのない話をする。またもや、地震が起こってからのことを一気に話し、30分くらいただ聞いていた。どこから来たのか？と聞かれた。私は埼玉、連れは東京と答えた。するとじいさん、いきなり涙ぐんだ。「ありがたい。ここに来てくれただけでありがたい。」としきりに言っていた。何もしていない気がしたので、「お互い様ですよ。関東大震災が起こったら僕らを助けに来てくださいね。」と言ったら、少し笑ってくれた。「力仕事とか、まじりませんか？」と言ったが、「大丈夫。」断られた。

また歩く。今度はおばあさんとその娘らしい。「おはようございます。川口町ボランティアセンターの者です。」家に案内された。2階建ての納屋はもう倒壊寸前だった。2本の太いワイヤと数本のジャッキでかろうじて支えられている感じだった。そのワイヤとジャッキは、馴染みの大工が手配してくれたと言っていた。

おばあさんの自宅。壁の損壊はあるが、外見は大丈夫な感じだ。「こっち来て見ていって。」と

屋内に呼ばれる。「僕ら屋内に入っちゃいけないことになってるんですよ。避難勧告解除されないと入れないんですよ。すみませんけど。。。でもせつかくだから縁側から覗かせてもらえますか。」限りなくごちなくかつ説得力ない返事をした。

おばあさんは屋内を見せてくれた。ア然とした。地震が起こる前は、さぞかし立派な家だったのだろう。厚くて輝くような梁。大黒柱とはこのことか、というような極太の柱。しかし。その見事な梁はあっさり折れ、柱にもヒビが入っている。柱に接ぐ細い角材なども見事に折れていた。屋内の壁はほとんど全て内側に落ちており、傍らに肩を落としたばあさんが力なく座っている構図だ。家の周りを見て廻る。家の裏手から地下水を引いており、これで助かっていると言っていた。家裏手の土台は崩れていた。これで家が建っているのか？というような状態。まるで片足でバランスをとって立っている状態だ。これで「一部損壊」と言われたら、泣けてくるだろう。実際には半壊以上の破壊状況だ。庭に箆笥のようなものが置いてある。屋内に入れたいけど、重いから出来ないと言っていた。「これ縁側まで上げましょうか？」と言うが、「息子にやってもらうから大丈夫。」とまたもや断られた。二人してちょっと残念がった。

おばあさんは話し続けた。地震が起こってからのことを一気に話す。途中、「お茶でもしよう。ささ、ここ来て。」なんて具合でまたお茶に誘われた。片づけを手伝っている娘さんと一緒にお茶することになった。

案内された場所は、農機具の倉庫のようだ。半円形のアーチ状の鋼鉄で骨組みされており、いかにも頑丈そう。地震の影響は見られない。現地民が言うには「トンネル工事で使った砕剤をそのまま使っているので壊れない。」という。なるほど、そんな感じだ。この辺の人はみんな避難所に行かず、そういう倉庫に暮らしていると言う。

地震が来てまず畑に逃げたこと、夜寒いので決死の思いで家に戻り、仏様に祈りながら布団を引っ張り出してきたこと、夜中に最初に助けに来てくれたのは自衛隊だったこと、その自衛隊の革靴の音を聞いて、戦時中の「軍靴」の音を思い出したこと。正にとめどなく話し続けた。30分、1時間、1時間半くらいだったろうか。途中、連れは何度も席を立ちそうになったが、なんとか諫めてひたすら話を聞いた。その間にバナナとチョコレートを出してくれたので遠慮しつついただく。十分に話したか、と思われたとき、聞いてみた。「あの、さっきの箆笥、運びましょうか？」ばあさんは言った。「じゃあ折角だから運んでもらおうかねえ。」娘さんも笑っていた。

ここで分かった。やはり、「救援」とはいえ、一番大事なのは被災民との信頼関係。いきなり行って「何かしましょうか？」では誰も「お願いします。」とは言わない。ここは隣も知らない都会ではないのだ。(うすうす感じていたが)まず人として理解してもらうこと。全てはここから始まる。1時間半、話を聞き、また笑いあったことで、おばあさんは心を許してくれたようだ。

私はすでに同様の経験を何度もしていた。それは海外でのキャンプ経験。異国人同士が接するとき、まず最初はその人が人間として信頼できるか、だ。全てはそこから始まる。その経験がここでも生きた。あとで連れに「あそこでバナナもらわなかったら、箆笥は今頃まだ野晒しだね。」と言ったら、「そうっすよねえ。」と頷いていた。

箆笥を運び、また歩き出す。もう昼近い。最後にもう一人話しかけた。若い女性だった。「特に助けてもらうことないんですけどねえ。あ、そうだ。子ども、困ってるんですよ。大人はみんな復興活動で忙しくて、子どもの相手できないですよ。かといって遊ばせるとまだ危ないでしょう？だから屋根のあるところでトランプとかしかできなくて。健康のためにも表で遊んで欲しいとは思ってるんだけど。」と言う。これは後のボランティア活動の大きなヒントになった。新たな需要の発掘だ。「子どもの遊び相手」。目先の復興の手伝いだけに目が行っていたが、そういう支援もあったか、と気づかされた。さっそく午後から別のボランティア部隊を派遣するように報告した。

昼をはさんで同じ地区の別方面へ向かう。今度はものすごいところに来てしまった。道は裂け、家々がほとんど崩壊している。まるで戦争で爆撃されたかのような。言葉も出ない惨状。車で行けないので、歩いてみる。めっちゃくちゃになった納屋で後片付けしている老夫婦に話しかける。

言葉少な。おばあさん、空を見上げて言った。「お先真っ暗だよ。。」返す言葉がなく、一緒に青空を見上げた。

歩く。おばあさんに会う。今度はとめどなく話される。しかも笑顔。「もう笑うしかないよ。」私たちも一緒に笑った。最後に。「こんなとこまで来てくれて、ご苦労様です。」これも破壊し尽くされた自宅の前で、深々と礼をされた。「いえいえ。」二人そろって、さえない返事しかできなかった。

とにかく歩く。中年の女性に会う。今度は最初から視線が冷たい。なんとか会話しようと思ったが、会話さえも嫌そうに見えた。ボランティアの新聞を渡して「何かあったら連絡してください。」と言って引き上げた。その女性の家は一階部分が潰れ、2階が1階になっていた。

しかしこの地区は午前中の地区とは少ししか離れていないのに、この崩壊の仕方の違いは何だろう？現地の人たちは口をそろえて言っていた。「地盤だよ。こっちとあっちじゃ、道を挟んで地盤が違うんだ。」

なるほど、初日の高速道の崩壊もそうだったか。高速道脇の一般道が崩れていないのが不思議だったが、こういうことだったのだ。つまり、高速道は盛り土の上に建設されていた。その盛り土が弱く、上に建設された高速道が崩れていたのだろう。それに対して、一般道は地盤に直接建設されていたのでさほどの被害がなかったと言えるかも知れない。

そんなこんなで、午後はただ歩いて終わった。ような気がした時、またあのおばあさんに会った。再び深々と御礼される。「僕ら何かできただろうか？」二人してつぶやきながら帰った。

こんな状態は、決してTVなどには写っていないだろう。よくTVに写る、避難所の風景は本当に一部の被災者だけの風景であり、多くは生まれ育った家や地区を離れずにいるのが現実だ。避難所には物も人も足りているというが、実際は全然違う。何もかも、全然違う。

救助を求める術を知らない被災者をどうやって救うのか。それが最も重要だ。ここでは、地縁血縁の縛りがありにも強く、外に助けを求める術を知らない人たちがあまりにも多い。これは行政の一番の盲点とも思えた。だからこそ、ボランティアが入り込む余地があるのだが、その連携がうまく機能していないことに、2日目にして気づいたのだった。

ボランティアセンターに帰って報告。「また明日、よろしく。」と言われたが、何とも言えない無力感に襲われた。

夜、ボランティアのリーダー会を覗く。避難所に避難していない大部分の被災者や、ボランティア自身の衛生状態が悪いことが報告された。「あの、何かお役に立てるかも知れません。話を詳しく聞かせてください。」と口を挟んでみた。

その夜、ボランティアリーダーの幹部、日赤のボランティア部隊、群馬県片品村から来たと言う保健師と話し合う。自分自身、事務職であることを繰り返す言うが、少しでも情報が欲しい様子。夜10時、長い一日が終わった。

11月10日(水)

朝方、震度5あり。地面が大きく揺れて仕方なく起きた感じの朝。

この日は現場隊を離れ、一日ボランティアセンターに居ることになった。というのは、昨日の衛生状況の件でボランティアセンターを見回って欲しいと言われたのだ。「事務職なんです。」と言ったが、役に立ちそうと見込まれたので、やってみることにした。今日は県の保健師が巡回に来ると言っていた。この巡回にも立ち会うことになった。

この日は一日中ボランティアセンターに居たので、知りあいが増えた。どのボランティアも士気が高く、不眠不休といった感じで働いている。被災者でなくとも本当に頭が下がる人たちだ。いろいろ話すうちに、ボランティアの状況、行政の状況がさらに見えてきて、全体像の把握といった面では良い一日とも言えた。

しかし肝心の新潟県の保健師はどうも現れなかった。ボランティア本部の人たちも、「いつ来るんですかねえ。」と言うばかり。こういう状況だから仕方ないと言えば仕方ないが、出来なけれ

ば他の自治体に助けを求めればいいのに。困るのは被災民であり、ボランティアだ。ここでも役所の縄張り争いなのか。先ほどの地縁血縁の話とはまた違ったボトルネックを感じた。

夜は10時までパソコンの手伝いをした。

11月11日(木)

再び現場隊へ復帰。朝7時、小学校児童の登校に付き添う。一応先生が付き添うが、一地区あたり2名のボランティアも付き添う。これはお母さんたちに大いに好評らしかった。

低学年の生徒は何が起こっているのかよく分からないところがあり、だいたい無邪気だ。しかし高学年の子は少し分かっているらしく、無口で元気のない子が多かった。話しかけるが、返事も少なかった。仕方ないので一緒に歩幅で歩いて小学校へ行った。

朝食をはさんで出発。今日は「相川口」という地区に行く。「のびのび隊」という子ども相手の部隊に同行する形となった。8時半頃現地の集会場らしき場所に到着。のびのび隊はすでに信頼関係が出来ているらしく、被災民と仲良く話している。

屋根にビニールシートで雨囲いをしていたが、すでに破れているようだった。はしごを借り、適当に直す。「若い人は身軽でいいねえ。」なんて下の方で言っていたが、傾斜の急な屋根に上って作業していた身としては、半分くらいしか耳に入らなかった。

ごみを片付けたり、お遣いにいたり午前中が終わった。昼、結構なご馳走が出る。「こんなにご馳走してもらっていいんだろうか。」なんて思ったが、のびのび隊は遠慮なくおかわりしている。しかもボンカレー卵つき。極上のごちそうだ。このナゾも、この後すぐ分かることになる。

午後、役割分担をする。のびのび隊は子どもの相手をし、我々現場隊はその地区の区長代理さんのところへ。そこに待っていたのは、結構な肉体労働だった。畑仕事、崩れた石垣の石拾い、用水路の清掃など。結構きつい。子どもと遊んでいる「のびのび隊」がいささかうらやましく思えた。しかし、よく考えてみれば、被災地区との信頼を築くためには、地を這うようなこの仕事こそが重要なのだろう。子どもの相手をさせてもらうには、まず「子どもの相手を任せていいか」という親御さんの信用を得ることが重要。それには区長さんの信用を得ることが一番だ。ここでは区長さんをはじめとした大家族のような仕組みになっているからだ。我々の肉体労働のお陰で区長さん(代理)には随分気に入ってもらえたようだ。「御礼の手紙でも書きたいのだが。」と言われたが「単なるボランティアなんで気にしないでください。」と言っておいた。さらに「さっきは遠慮しないでもっと食べておくべきでした。」と言ったら笑われた。

2時半頃、肉体労働も終わり、のびのび隊と合流。子どもと遊ぶ。ある子になつかれてしまい、おんぶ競争とかでいつも指名される。そのたびに走らざるを得ず、正直疲れた。しかしその子はそのたびに「もう1回！」などと大喜びし、何回も走る羽目になった。まあ大いに喜んでくれたので良しとしよう。

3時半頃、そろそろ終了の時刻。なついてしまった子は、私が明日帰ることを知ると少し寂しそうだった。なので「現場隊 大野」という名札をあげた。ちょっとうれしそうにしてくれた。

帰り道、自衛隊部隊と遭遇。私が一人でいると、珍しく向こうから話しかけてきた。「お疲れ様です。」疲れてそうなのは自衛隊員のほうなのに、そう言ってくれた。彼らは長野から来たという。しかも日帰りだとか。しばらく話したが、のびのび隊の仲間が戻ってくると、見られてはマズイかのようにそそくさと去っていった。

ボランティアセンターに帰って報告。今日は疲れた。しかしようやくペースがつかめてきたのに、復路のバスは明日の予約になっていた。全く惜しいことなので、バス会社に電話。「予約変更したいんですけど。」と言うと、「発券済みのチケットを窓口にお持ちいただかないと変更できません。」と冷たく言われた。「あの、今ボランティアセンターに来ていて、とても窓口に行けないんですが」と言ってみると、「残念ながらお持ちいただかないと」との返事。仕方ないがあきらめるしかない。各所に引継ぎ、ご挨拶して、夕方から最後のパソコンの手伝い。

夜には5日ぶりの風呂へ。「自衛隊風呂」である。ボランティアは被災民と同様に入浴が認めら

れているのだが、なんだか気が引けてそそくさと出てきた。風呂場で若い自衛隊員が「どなたか携帯電話忘れませんでしたか〜？」と一生懸命探している。自衛隊に入って、風呂の忘れ物の世話。それはないだろう、という仕事を実直にこなす隊員に深い敬意を覚えた。帰り道、「ありがとうございました。お疲れ様です」と言って最敬礼してしまった。

11月12日(金)

去りがたきボランティアセンターを去る。越後川口インターより路線バスに乗り、小千谷インター高速バス停に到着。バスの待合所で、サラリーマンらしきおじさんにいきなり「ご苦労様です。」と言われた。後ろを振り返っても誰もいなかったの、自分に向かって言ったのは間違いなかったのだが、思わずキョトンとしてしまった。「はぁ。」と意味不明の返事しかできなかった。

やがて高速バスが来た。乗った。寝た。爆睡。池袋に着く。同じく小千谷から乗ったご婦人に「ご苦労様でした。」とまた突然言われた。「苦労なんかありませんよ。何もできないまま終わっちゃいました。」と言ったら、深々とお辞儀をされた。

ザックを背負ったままビックカメラに行き、USBメモリを購入。ボランティアセンター広報班で困っていたので、着いたら速攻で送ってやろうと思っていた。店員が大きなザックにちょっと驚いていた。

助けに行ったつもりが、実は助けられたのは自分だった。
そういう5日間だった。